

筑駒について

福田 孝

附属駒場中・高校教諭（広報係）

こういう機会なので、また大学関係の方のなかには附属のことを知らない方もいらっしゃると思うので、勤務している附属駒場の紹介の文章を書きたいと思う。

附属駒場中学校・高等学校は、渋谷から井の頭線で二つ目の駅「駒場東大前」から徒歩七、八分のところにある。駅の北側には東大の駒場キャンパスがあり、駅の南西には目黒区立駒場野公園と大学入試センターがある。ここはかつて東京教育大学の農学部が敷地だったところであり、筑波への移転にともなって公園とセンターとに変貌した。この二つを通り過ぎたところに附属駒場はある。そう。勘のいい方はお気づきだろうが、附属駒場は農学関係の附属学校として昭和二十二年に発足した学校である。もと東京農業教育専門学校の附属として発足し、やがてこの東京農業専門学校在東京教育大に包括され、その後この専門学校の閉校に伴い、大学直属の附属となった

という経緯がある。筑波にも大塚にも縁がないような、駒場という土地に附属校がある所以であり、いまでも附属駒場の中一と高一とは、駒場野公園内にあるケルネル田圃（ドイツ人ケルネル博士が近代農学に基づいて稲作を研究した田圃、日本近代農学発祥の地）で、田植え・草取り・稲刈り・脱穀といった農作業体験を経験する時間がある。そしておそらくは発足が農学関係の附属だったせいであろう、クラス数が少なく、男子校である。

中学は一学年3クラス。一クラス40人で学年人数120名、高校には全員が進学する。高校は一クラス分40人を入試で増やし、一学年4クラス160人となる。これは中学校、高校としては規模は小さい。しかし、そのせいだろう、生徒同士はお互いに気心の知れた存在となる。これは教員サイドからしても同様だ。

筑駒が語られるとき良くも悪くも東大へ

の進学率で語られることが多い。たしかに率だけ見れば、日本一なのだろう。しかし、生徒はけてガリ勉をしているわけではない。有名私立進学校などのように高校三年生の授業において入試の問題演習が中心といった授業がなされているわけではない。生徒は校内でガリ勉をしている態度は見せないし、もしガリ勉をしていれば生徒間で干されてしまうだろう。なによりも筑駒生として存在していけない。筑駒生としてやっていくためには校外学習・音楽祭・体育祭・文化祭・ロードレースといった、豊富に準備されている学校行事をきちんとこなしていかななくてはならない。クラス単位で参加する音楽祭や文化祭を、先輩たちがやって来たレベルで保っていこうとするならば、毎朝五時起きで登校、といったようなことを平気でやりおおせていかななくてはならない、六月半ばにある音楽祭に向けては五月から、十一月文化の日前後にある文化祭に向けては九月下旬から。とにかくこうした学校行事を生徒はがむしゃらにやりぬく。ときには意見が合わないクラスメートと怒鳴り合いのケンカをやりながら。そして仲間意識がはぐくまれる。

学校行事の中で最も大変なのは、高校三年生で迎える文化祭だ。それまでクラス単位で参加していたのが、クラスを解体し、食品班・演劇班・喫茶班・ステージ班・緑

日班といったように班単位に分かれ、とにかく文化祭の三日間をめざして生徒は青春を燃焼する。班は高次の十一月後半に結成され、約一年間にわたって綿密に計画を練り、準備していく。或る生徒は焼きそばを作ることに熱意を燃やし、或る生徒はステージでの催し物の計画・台本書きに熱中する。文化祭に訪れる子供たちを一日に千人以上相手にしてジャンケンをし通した生徒もいる。おそらく全国の高校の受験生が受験勉強を本格化させている高三の夏休みから夏休み明けの九月十月を、筑駒の高三生は文化祭の準備に明け暮れている。中一生は遙かな存在として高三生を見、五年後に自分たちがその高みに達せられるよう、高三生に憧れる。

部活動も盛んである。生徒の下校時間は午後六時であり、中学生と高校生とが同じグラウンドを使うため、例えば、中学生は火・木に、高校生は月・水・金に、練習をする。限られた時間を、要領よくいかに効果的に使っていくかを考えながら練習に取り組む。

筑駒を語るときに使われる言葉として「自由闊達」がある。制服はなく私服、持ち物についても規制はなく生徒は携帯電話もゲーム機器も漫画も校内に持ち込み自由、世間からすれば無法地帯である。しかし生徒に一定の良識が働くはずだという教員側の生徒への信頼があるからこの状態でずっ

とやってきている。生徒は「自由」に伴う「責任」を自覚したうえでその「自由」を謳歌して「闊達」にやってきたのが今までの。

進学率を見て（おそらくそれだけではないと思うが）、筑駒をめざして難関を突破して入学してくるのだから生徒の知的レベルは高い。その生徒を相手にするためには教科書だけで授業は成立しない。当たり前前の学習内容を、当たり前前のようにしていかなければ、普通の高校や中学の二、三時間分の授業が、五十分の授業時間で終わってしまうこともある。その生徒の知的好奇心を満たしながら授業を成り立たせなくてはならないのだから、小手先の、大学受験だけを念頭に置いた授業内容では駄目だ。筑駒で教科書を使う授業が少なく、配布プリントで授業が行なわれる所以である。

多くの保護者が、子供を筑駒に入学させてみて、とにかく楽しく通学している、学校に行くのが楽しくてしょうがないようだ、と言う。生徒も保護者も筑駒への満足度は高い。

この三月に卒業した生徒の卒業文集から引用する。

「筑駒の特徴として十人いたら八人くらい(?)の人が挙げるのが、「自由闊達な校風」だろう。実際、筑駒はジユウだ、カッコタツだ。やる気さえあれば何だって自分の好きなことが出来るのが筑駒のいいところだ。先生だってうるさくない。他の

学校では、教師はウザイものだという一般常識がはびこっているが、筑駒には自分の考えを生徒に強制する人はいなかったし、物分りのいい先生も多かった(と思う)。とにかく筑駒はぬるま湯のように暮らしやすい。しかしぬるま湯のような自由は諸刃の剣となりうる、というのは昔からよく言われることだ(たぶん)。自由にかまけて何の勉強もしなかった僕の学力は筑駒に入って下降線をたどり続けた。実際、この筑駒には中一の始めと高三の終わり以外は馬鹿だったというやつが結構いるはずだ。(中略)ぬるま湯の生活の中に刺激を与えてくれるスパイスが音楽祭、文化祭、体育祭、文化祭といった行事である。特に僕は文化祭への思い入れが強かった。思い出したくないような未熟さゆえの失敗はあるが、文化祭なしには今の僕はなかっただろう。仲間とともに一つのを創り上げていく過程、それが形になったときの喜びは、普段なかなか味わうことが出来ない。文化祭前の慌ただしさ、文化祭中のにぎやかさ、終わった後の打ち上げの盛り上がり、片付け後の虚無感の全てが僕は好きだ(片付けは嫌いだ)。今、これを書いている時も文化祭後のノスタルジーに浸っているが、いままで打ち込んできたものが終わってしまったときのこのなんともいえ

ない漂泊感が、僕はなかなかどうして好きなのである。(後略)』

教員間のあり方も、民主的であり、風通しよく意思の疎通ができる。また転勤があまりないため伝統校風が維持される。

私自身、筑波大学の卒業生だが、大学生のときに駒場中・高校についての、附属校であるという認識はあまりなかった。大塚にある附属小・中・高校については認識をしていたにもかかわらず、だ。実際、教育実習に赴いたのは附属高だった。その私が駒場にある附属中・高に勤務して十三年になる。勤務してはじめて分かったのは、どうもこの学校は附属でありながら本体である大学からの影響をあまり受けてきていないということだ。影響を受けないというのは、上からの押さえつけ、締めつけがあまり無いということだ。そういった所で、良識のある教員が、生徒を育て、学校を作っていくと、どういうことになるのか、という、その結果が、附属駒場の現在の姿だ。もちろん瑕瑾はある。しかし大局から見た場合、附属駒場は、世間でいう、理想的な学校のありように近い。

しかし、この学校をなくしてしまおうという意見が、私がこの学校に勤務をしはじめてから十三年のあいだに筑波の地から何度も聞こえてきた。紙の上だけの事務処理、数字合わせのために一つの学校をなくすの

は簡単なことだけれども、ひょっとすると取り返しのつかないことなのだ、ということをよく認識したうえで附属の要不要は論じてほしいと思う。もともとは農学関係の附属校としてスタートしたはずなのにいつの間にか進学校となってしまった学校であるけれど、教育の機会均等がなしくずしになりつつある現在、私学ではなく公立で筑駒のような学校が存在することの意味はあるはずだ。

筑駒は文科省が行なっているSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)の指定校として、その研究開発の四年目に入っている。学内におけるプロジェクトとして「筑駒「リーダー形成」プロジェクト」の研究も進行中である、また附属校から筑波大学に進学するための特別推薦枠の検討も始まっていると聞いている。これらだけでなく、筑駒の使い道は大学の先生方からすればまだまだあるように思う。

五十年以上の年月を積み重ねてでき上がった、ひとつの学校の伝統・校風は、なくすことは簡単だけれども、甦らせることはおそらく不可能だ。筑駒の廃校を論ずる人は一度は筑駒がどういう学校であるのかを実際に足を運んで現場を見てからにしてほしいと思う。以上のことは筑駒だけでなく、ほかの附属校でも同様のはずだ。
(ふくだ たかし/国語科)